

撰津呉田吉田家の文事と出版

一戸渉

The Yoshida Family of Goden, Settsu Province : Cultural Activities and Publications in the Late Edo Period
ICHINOHE Wataru

- ① 吉田道可伝の再検討
- ② 道可の学芸と雅交
- ③ 道可の蒐集と出版
- ④ 道可以後の吉田家
- ⑤ 『聆涛閣帖』の出版

【論文要旨】

本論文は近世後期の撰津国呉田くわだの豪商であった吉田家の三代、とくに吉田道可（一七三四～一八〇二）を主たる対象として漢詩文や和歌、俳諧、茶道、医学、茶会興行、好古など多方面にわたる彼の学芸上の諸活動並びに文人諸家との交流について跡付け、また吉田家が蒐集した古物の模刻出版の実態を解明することを目的としたものである。

本論文ではまず道可の墓碑銘の検証を行い、そこに記された以外に道可が使用していた号や字の類を同時代資料に基づいて明らかにした。続いて墓碑銘において道可が師事し、あるいは信頼を寄せたとされる儒者の林東溟、医師の吉益東洞、公家・歌人の日野資枝、公家で能書の大炊御門家孝と道可との関係をそれぞれ検討した上で、道可による寛政七年（一七九五）及び八年の銀閣寺での茶会興行について『都林泉名勝図会』増修本に見られる関連記事に基づいて跡付け、谷文晁のものはじめ現存する道可の肖像画についても整理を行った。

加えて道可の蒐集品をめぐる諸名家との交流や、玉田成章編『耳比磨利帖』（天明七年序刊）や松平定信編『集古十種』・『集古文書』に道可の所蔵品が掲載されていることなどについて論及し、道可自身が自身の蒐集品の模刻を作製し頒布していた事実を、現存する刷物や尾崎雅嘉『群書一覽』（享和二年刊）の記述などから明らかにした。

道可以後の吉田家当主である肅（一七六八～一八三二）と敏（一八〇二～一八九）に關しては、それぞれの墓碑銘を紹介した上で、肅には学芸上の活動が確認できず、他方で敏は蒐集品を通じた諸家との交際など道可のふるまいを反復しようとした形跡があることを指摘した。さらに現在二種類の存在が確認できる刊本『聆涛閣帖』の出版も敏の主導で行われたもので、同時代に版行されていた好古図譜の影響を受けつつ編纂されたものと評価できることを述べ、国立歴史民俗博物館の所蔵する『聆涛閣集古帖』編纂の背景の解明を試みた。

【キーワード】 吉田道可、吉田渚翁、松平定信、聆涛閣帖、好古家、出版、近世学芸史